

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣帰国報告

岸田陽子
人文社会系研究科基礎文化研究美術史学専攻 博士課程1年
平成23年度冬個人派遣:大学院生

研究課題名

19世紀後半におけるサウス・ケンジントン博物館の帝国主義施策-1876年の日本の博物館への寄贈行為を中心に

派遣先での活動

(1) イギリス (主要調査地はロンドン、エジンバラ)

(2)

出発日 2012年2月1日

帰国日未定 在英中

総日数 本プログラムによる研究期間は3ヶ月

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

1852年に産業製品美術館としてスタートしたサウス・ケンジントン美術館(現V&A美術館)が、19世紀後半の日本に、また他の諸外国に対してとった外交的態度について研究する。その手掛かりのひとつとなるのが、1876年に同美術館が日本の内務省管轄下の博物館に対して行ったヨーロッパの美術製品の寄贈である。本派遣では史料調査と関連作品の接見により、1876年の寄贈にかかわる歴史的状況を把握する。

(2) 実際に達成された成果

調査研究はV&A博物館のほか、同付属図書館(National Art Library)、同史料館(V&A Archives)、国立公文書館(National Archive)、スコットランド博物館などで行われた。1876年の寄贈そのものに関する目立った新資料を文書調査で得ることはできなかったため、特に調査期間の後半は同時期、1870年代前後の交換や、英国からの寄贈と対になりうるような日本から英国への工芸品の移動に焦点を当てた。

スコットランド博物館では1876年の寄贈行為との比較を試みるため、同時期の日英間の美術品交換事業によって英国に贈られた作品や明治維新前に行われた寄贈に関して調査した。特に徳川家茂からヴィクトリア女王へ贈られた作品の調査では、非常に長い間倉庫に保管されていた品々を間近に見ることができた。博物館に残る記録からは、女王に贈られたのちにサウス・ケンジントン博物館に譲渡され、さらにスコットランド博物館へと移管された経緯が判明した。

また1870年代の万国博覧会に際してサウス・ケンジントン博物館が獲得した日本陶磁器について、大英博物館の列品管理官であったオーガス・フランクスが陶磁器解説本を出版し、英国内で初めての本格的な日本陶磁器の紹介となったが、その挿絵となった画家の手帖を大英博物館の学芸員の仲介で接見することができた。

(3) 今後の研究展望

徳川幕府から贈られた染織品の退色具合などから、実際にそれらが英国で展示されていたことが明らかである。日本の美術品が当時どのように展示、鑑賞されていたかを考える上で貴重な手掛かりとなるだろう。大英博物館にある陶磁器解説本挿絵によって、当時フランクスたちが目にした作品群が色図版でわかる（出版される際にこれらの図版は白黒の図に描き直されていた）。これら陶磁器の多くが英国政府を通じたサウス・ケンジントン博物館の購入品であり、とくにウィーン博覧会では展示以前から購入が決定され日本で準備されていたことと考え合わせ、当時日本陶磁器に対して英国でどのような紹介・理解がなされていたのかを考察していきたい。また、それが日本における陶磁器産業の実態とどのようにずれていたのかも今後の研究テーマとなる。